

私の実家は、大正以来現在の広島教会の南隣りでしたが、八月の六日の原爆の当日、私は家の二階で被爆しました。爆心地より一・三キロの至近距離で、重傷を受けました。

当時私は現広島大の一年生で、一八歳でした。聞きなれていたB29の爆音を耳にして二階の窓から、真っ青に晴れ渡った空の中を音もなく瀬戸内海の南の方向に飛んでいくエノラ・ゲイを眺めていました。別に恐怖も不安もありませんでした。連日B29が飛来して偵察写真を取っていたからです。

彼らは入念に爆弾投下の準備や訓練をしていたのです。やがてエノラ・ゲイが見えなくなったので窓から首をひっこめた瞬間、私は青白い閃光の渦の中に巻き込まれました。その瞬間は一・三キロ地点は恐らく約五〇〇度近い高熱に晒され、屋外にいたひとは全身大火傷をし、コンクリートの建物を除き、木造の家屋のあちこちから出火し、忽ち火災になりました。

幸い私は窓から首をひっこめた瞬間だったため、顔を焼かれることは免れました。あの時、もし空襲警報か警戒警報が出されていたなら、多くの市民は助かったことでしょう。当日朝七時頃、前日の山口空襲が終わった直後だったので軍部は広島飛来のB29を見逃し、警報を解除したので市民はほっとして屋外で仕事や運動や出勤をはじめた時だったのです。

その直後、五五〇メートル上空で炸裂した原爆の爆圧力が全市を覆い、殆どの家屋は倒壊しました。風速五五〇メートルと言われていますが、私の家も全壊し、私はその下敷きにあって全身に重傷をうけました。暫く意識不明だったのですが、気がついた時は無意識のうちに倒壊していた家から這い出していました。その時母が私の名を叫んでいるのを聞いてわれにかえり、あたりは瓦礫や電線で無茶苦茶になっている道を通って、近くの日本赤十字の庭に飛び込んでいきました。直撃弾にやられたと思ったので、日赤に行けばすぐ治療してくれると思ったのです。しかし日赤では既に体中焼けただれた、男か女かもわからない幽霊のような被爆者でござった返していました。私はまた意識不明になり、夕方まで日赤の庭に倒れていました。一・三キロの地点は三〇〇〇ミリ、シーベルトの放射能を受けているとABCに勤務しておられた玉垣さんからききましたが、更に一日中日赤の庭に倒れていたのです。死の灰や残留放射能によって、少なくとも四〇〇〇ミリシーベルト以上の放射能を浴びていたにちがいません。ちなみに、現在フクシマ原発事故で原子炉修理の作業員の放射能許容量で、その量は一〇〇ミリシーベルト以内と定められており、政府は上限を二五〇ミリシーベルトにまであげるかどうか検討中です。それでも重装備された作業員は一〇分以内しか働けず、その後一年間作業は禁止されています。四〇〇〇ミリシーベルトの放射能を受けるといことがどのように重大なものであるかがわかります。それは許容量の40倍の放射能を浴びたこととなります。

四〇〇〇ミリシーベルトを受けた者はその後一カ月に半数は原爆症で死亡するといわれています。六六年後の現在も原爆症認定訴訟が続いていますが、それは体内被曝となって被爆者を苦しめ続けているからです。

その後私は似ノ島に運ばれ、一万五千人の被爆者とともにこの世の地獄のような経験をつみましたが、九死に一生を得て、疎開地庄原に逃げ帰りました。そして庄原の日赤で治療をしてもらいましたが、医師には白血球八〇〇（健康な人の一〇分の一）の急性白血病であると宣告されました。今日なら無菌室に入院しなければ危険な病気なのですが、当時は誰も原爆症について教えてくれる者はいませんでした。二年ばかりの外傷を中心にした療養中、黒い斑点やいわゆる原爆ぶらぶら病といわれる極度の倦怠感と疲労感に悩まされ続けました。

軍国少年であった私は生きる心の支えを失い、精神的にも肉体的にもどん底に突き落とされ、その中で

自分の生の意味は何か、生きている目標は何かを問いつづけました。幸い私の叔父は有名な宗教文学者だったこともあり、私は親鸞やキリストのことを学ぶようになりました。当時実存哲学もはやり、様々の思想的な遍歴を通して結局キリストの教えこそ、私の生きるべき道であると確信するようになりました。そこで当時鷹野橋にあったジュラルミンの広島教会に通い、結局四竈牧師の勧めもあって、広島大を中退して東京神学大学に入り、牧師になる道をえらびとりました。終戦直後の苦しい時でもあり、早く卒業して就職して欲しいと思っていたかも知れませんが、熱心な仏教徒である両親はよろこんで私を神学校に送ってくれたことは本当に感謝です。

神学校の修士論文のテーマは「パウロにおける罪の理解」でした。私にとって原爆と戦争の体験から人間の罪の問題が頭から離れなかったのだと思います。次々と日中戦争や世界大戦の悲惨で残酷な行為が明るみにでてきました。森村誠一の『悪魔の飽食』や『三光作戦』や南京大虐殺、バターン死の行進等々、日本軍は中国人にたいするおおくの虐殺で一二〇〇万人を犠牲にしたこと、またヨーロッパではナチによるユダヤ人の大量虐殺記録、たとえばフランクルの『夜と霧』と言うアウシュビッツの数百万人のチクロンBによるガス室での虐殺など、次々と暴露されてきました「なぜ人間はここまで無差別大量虐殺をするような悪魔的な人間になりうるのか」と言う問題は私にとって最も大きな問題でした。

アウシュビッツ所長のアイヒマンはその一例でした。彼は敗戦直後ドイツから逃亡しました。しかしユダヤ人は彼は自首したり自殺したりするような勇気のある人間ではないと確信していました。事実彼はアルゼンチンにのがれているのを発見され、エルサレムで裁判を受けることになりました。世界中の人間の目が裁判の行方に注目し、皆あのようなことをする人間は血も涙もない悪魔のように恐ろしい精神的に異常な人間であることが明らかにされることを期待しつつ見守っていました。しかし裁判の結果は全く人々の期待を裏切るものでした。彼はどこにでもいるごく平凡なやさしいパパであり、夫であり、気弱で臆病な人でした。虫も殺せない程の臆病な人であったので、彼がナチの綱領であり、大義名分に洗脳されてから人間が豹変し、人間の命を虫けらのように殺すことが出来るようになったのです。その「大義名分」とはアーリア民族、すなわちドイツ民族の血の純粋性を守ること、世界を滅ぼすユダヤ人を全滅させること、そして共産主義（マルクスはユダヤ人）と戦うこと、等でした。そのような思想に洗脳された彼は人間が全く豹変してしまったのです。

「彼がごく平凡な人間であったので、私たちに恐怖に落とし入れた」とハンナ・アーレントの『エルサレムのアイヒマン』には記されています。これは又あの大東亜戦争における日本の軍人たちの残虐行為にも当てはまる事柄ではないでしょうか。

聖書にも全く同じような物語があります。有名なゲラサ人の狂人の話です。イエスは伝道の途中ゲラサ人の地で一人の精神障害者と出会われました。彼は鉄のくさりを引きちぎり、鉄の足かせを踏み砕くほどの凶暴な人で、大声で叫び続けていたというのです。イエスは彼に同情され、悪霊に取りつかれている彼を救いだし、悪霊を二〇〇〇頭の豚の中に追い込まれましたが、豚は海に飛び込んで全部死んだ、という面白い話です。ここでいわれていることは、悪霊は理性という鉄のくさりをも引きちぎり、道徳という鉄の足かせをも踏み砕く力をもつものであるが、イエスはそのような悪霊に勝利し、追放される権威ある方であるということを示しているという話なのです。

聖書には度々悪霊、悪鬼、悪魔の話が出てきますが、皆さんはそんなものは昔の民間信仰であり、オカルト的なたとえ話として軽視してはいないでしょうか。

カトリックの作家で加賀乙彦氏の作品に『悪魔のささやき』という本があります。加賀氏は犯罪心理学の学者で精神科医でもあります。刑務所や拘置所で死刑囚や重犯罪人の精神鑑定書を作成もされていま

した。その中で次のようなことを記しておられます。

当局からは「一体いつ殺意を決意し、実行をしたか」を決定するように要求される。その時間を書かないと鑑定書にはならないのです。でも、これが非常にむずかしい。決意の瞬間なんてものは実に曖昧で、たいていは殺した本人でさえわからない。発作的な殺人もあるけれど、いずれにせよ犯行に至るまで様々な心理的葛藤や躊躇があり、複雑微妙に揺れ動きます。最後まで明確な殺意のない場合もあります。その瞬間を特定できる筈がない。だからしようがないから私は「何何と思われる」と推測を書くわけです。要するに悪魔に背を押されたような感じ、いわゆる「魔がさした」、としか表現できないのです。

殺意があったか、なかったかは法廷で死刑になるか無期懲役になるかの決定的な事柄なのですが、しかし自分でもよくわからないケースが多いのです。そこで加賀氏は神父に「本当に悪魔がいるのか」とたずねたところ、カトリックでは「神は天使は造られなかったが、悪霊は人間の信仰をこころみるために創られた」と言われたそうです。事実バチカンでは公認のエキソシスト（悪鬼追放者）と呼ばれる神父が全世界に数百人いるとのことでした。

パウロも「欲する善はこれをしてしないで、欲していない悪はこれをおこなっている。ああ、悩める人かな。一体この死のからだを誰がすくってくださるのだろうか」と叫んでいます。彼も自分の意志を超越したなにかを感じていたに相違ないでしょう。

加賀氏が『悪魔のささやき』という本を書かれた一番大事な目的は、あの日中戦争や大東亜戦争において、日本人がなぜあんな凶暴で無差別な虐殺を平気で行ったのか、その日本人の精神的な構造を明らかにするためでした。

本来国際連盟によって所謂『国際人道法』なるものが制定され、ジュネーブ条約やハーグ陸戦条約等によって、たとえ戦争であっても倫理や人道に反する行動をとってはならないことが厳しく規定されています。非戦闘員や捕虜を殺害したり、虐待したりすることも禁じられています。しかし一度戦争になればこの様な規定は紙屑同然に無視され、廃棄されてしまうのが実情です。むしろ戦争が始まれば「大義名分」なるものがかけられ、その大義のために死ぬことは名誉なこととして宣伝されます。そして愛国心やナショナリズムが横行し、国民はマスコミや教育によって完全に洗脳され、マインドコントロールされてしまうのです。その時、まさに悪霊や悪魔が人々の心の中で活躍しはじめるのです。

パウロはコリントの第二の手紙のなかで次のように言っています。

「驚くには及ばない。サタンも光の天使に偽装するのだから。たとえサタンの手下どもが義の奉仕者のように偽装しても不思議ではない」。義の奉仕者とは文字通り「大義名分」の奉仕者だということです。日本は一体いつ頃から悪霊にそそのかされて「大義名分」を掲げるようになったのでしょうか。そのことの歴史的反省なしに、私たちは今日の平和を語ることはできませんし、何故原爆が投下されたのかの歴史的背景を理解することはできません。

日本があの大戦に突入して行ったのは一九〇六年の日露戦争の勝利に始まります。世界の大国ロシアに大勝利したということは、極東の小さな、資源もない小国日本の意識を大きく変えてしまいました。それ以来日本は大英帝国にあやかって「大日本帝国」とみずから呼称し、帝国大學がつくられ、帝国主義政策を次々に決定して行きます。そして大和魂という名の愛国心が植え付けられてきます。そして五年後の一九一一年には朝鮮合併を行い、更に一九三二年には帝政ロシア軍の満州からの撤退を期に、中国東北部の満州を獲得して満州国というカイライ政権を樹立してしまいます。しかし国際連盟は反対したため、日本は国際連盟を脱退し、世界から孤立した道を歩むようになります。

日本政府は戦場の不拡大を考えていましたが、天皇の統帥権を持つ軍部は政府の弱腰に対して更に戦火の拡大をはかり、一九三七年盧溝橋事件を発端にして日支事変を起こし、中国奥深くまで侵入していきま。そして南京大虐殺や重慶無差別空襲等、様々な非道な行為を繰り返しました。

しかし加賀氏が最も悪霊が活躍したのは一九四〇年であるとしています。この年、日本は日独伊三国同盟を樹立し、紀元二六〇〇年の大祭典を全国に繰り広げました。天皇は現人神であり、日本国は神の国であるということを国民の骨の髄まで叩きこんでいったのです。マスコミも同調するだけでなく、先頭に立って推進して行きました。その時の大義名分は「大東亜共栄圏」ということでした。ヨーロッパはドイツが新しい秩序を形成し、日本は東洋における欧米の支配を脱却して、天皇を頂点とする神の国である日本を中心にした新しいアジアの秩序を形成しようと考えたのです。その熱気は日本を完全に飲み込み、反対することは殆ど不可能でした。悪霊に魅せられたあのゲラサ人の狂人と全く同じ状態になってしまいました。

それだけでなく、唯一反対しなくてはならなかったキリスト者もこれに同調し、日本基督教団を樹立、政府や軍部の言うままに盲従していきました。教会ではこの戦いを聖戦とし、協力し、勝利を祈り、礼拝の前には宮城遙拝し、神社参拝を強要しました。富田統理は朝鮮にまで行き、天皇は神であり、神社参拝は宗教ではなく国民儀礼であると主張、それに反対する二〇〇〇人の韓国人は逮捕され、五〇人の牧師は獄中で殺されてしまいました。そのような悪魔的な大罪を犯しながら、戦後教会はアメリカの支援を受けてキリスト教ブームと呼ばれる時代を過ごしました。教団の首脳たちは自分たちの犯した罪にたいして厳しく反省することも全くありませんでした。そしてやっと戦後二二年たって初めて『第二次世界大戦における教団の戦争責任の告白』が鈴木正久議長の名によって発表されたのです。ここで議長は教団はキリスト者としての良心的判断によって、あの戦争や祖国の歩みに反対しなかったこと、そして多くのアジアの同胞に罪を犯したこと、そして地の塩、世の光としてのキリスト者の見張りの使命をおろそかにした罪を神に懺悔し、隣人の許しを乞うたのです。私たち現代人は核時代に生きています。核時代では、あるいは地域紛争のようなものはあっても、もはや戦争を正当化しうるいかなる「大義名分」も存在しないことを確認しなくてはなりません。

私は日本はGDP世界第三位と言う経済大国であるというようなことを誇るのではなく、世界の唯一の被爆国として、また戦争放棄を宣言した平和憲法を持つ国として、世界から尊敬され、信頼される平和を創り出す国になることこそ、私たちキリスト者の歩むべき道であることを信じます。